

敵島における本地垂迹

白石 一美

序

瀬戸内の海に金胎両部の大鳥居が朱に輝く敵島神社における神仏習合の様相を論じた久保田 収「敵島神社における神仏関係」¹⁾に二つの問題提起がある。

一つは平家物語に清盛の敵島修造を説くが、仁安三年(1192)の敵島神主佐伯景弘の更なる修造を申請する解状には、「この度は景弘が私力を励して修造したが今後は国司重任の功による修造方願」旨記されて清盛の関与の見えぬこと、いま一つは平家物語に「敵島は無きが如くに荒果て候」と記すが、解状には修造された建物がならんで物語と解状の落差矛盾をどう理解すべきかという趣旨のものである。

以上二つを契機に敵島における神仏習合・本地垂迹の具体相を調査・概観してみたい。

一

景弘の解状による申請に対し、

朝廷は早速、安芸国司藤原能盛を重任し、翌年三月に修造日時定を行なっている。造営したばかりのものを、早速修造するというのは不審であるから、多分景弘の力だけでは完成しなかつたので、このような形で援助を請うたものである。²⁾

と解する立場もあり、兵範記(1693.20)に「此事無先例、去年当国司尊重任功、可修造由被宣下了、重任申請初被勅下日時也」と

異例としつつも修造日時を勘定している。

解状中、将来の危惧³⁾の中や当年五月浅間神社重任の迅速なる情報入手にやや疑問が残るが、以下、解状の中から仏教施設(含若干の他施設)を抜書して仁安の修造状況を示す。

本宮分(注 島内の本社) 三十七宇 間数三百間

(九間二面の宝殿一字を含み以下18項20宇省略)

五間二面同御読経所屋一字

五間二面同経蔵一字、百十三間同廻廊一字、同四足一字

同鐘楼一字、(以下仏教施設なし 14項省略)

外宮分(注 島外本土側地御前社) 十九宇 間数 七十七間

(六間一面の宝殿一字を含み以下5項5宇省略)

五間四面同神宮寺一字

三間四面同法華三昧堂一字、(6項6宇省略)

三間二面同御読経所屋一字、三間同釜神殿屋一字

二間二面同御読経所屋一字、七間二面同庁屋一字(同前

以下3項省略)

見られる如く相対的に外宮分には僧が座する施設の数が多く本宮分には少ない。少ないのは狭い島内の施設がほぼ整って本土側に新たなる設置をみたものと判断する。以下分析する。

座主坊舎の記載が無い。施設名から鐘をつく僧や經典を書庫に出し入れする僧の存在が考えられるが、仏教施設を統括する座主の寺院は本宮よりも稍奥深い弥山山麓に既設置のため記載されなかつた

ものと判断する。解状より約八年後の安元二年(1176.01.16)、清盛は厳島に千僧供養を催した。「……清盛公一切経会之次第」と端裏書されるその供養日記³⁾のなかに「比叡御社」とある。これは日吉(ひえ)山王社であろう。「明治維新神仏分離史料」⁴⁾(四、山王社)に「本社の東、紅葉谷の入口に在って、……と前置きして厳島に山王社あるは注意すべき事で、厳島神社は嘗て天台僧の習合を経たものかとも思はれるのである、分離後その名を三翁社と改めた、

と記す。意を汲むに天台比叡辺りで修学した僧が厳島神社(附属寺院)の座主に就任、彼は厳島の三二叡山化を企画して琵琶湖近い比叡坂本の鎮守神日吉山王社を厳島へ勧請(分霊)の謂かと思われる。

その天台僧の寺とは翌安元三年(1176.5)「伊都岐嶋弥山水精寺御勤日記」⁵⁾(野坂文書317号)所見の水精寺と思われ、その山号弥山は神社の背後に聳えるミセンに因むと判断する。水精寺が島外にありとすれば山号に矛盾する。寺は叡山同様山中に位置し、山の鎮守比叡御社は、供養の行道路、琵琶湖よろしく海の鎮守厳島本宮近くに位置する。

安元三年、水精寺に阿闍梨一口が置かれ(1177.5太政官牒案・野坂文書319号)、勤僧十数名を数える寺院である(同318・322号)。治承四年(1180.1.17)の水精寺文書(同322号)に「字頭阿闍梨大法師」・「治二年(1241.9.11)の「九月一切経請定」(同325号)に「座主・字頭・恵観房阿闍梨」3名のほか都合29名を挙げ、建長前後(1242.9.15~1259.9.13)の諸文書、その「一切経会の衣服文書(同327号)に「先座主」・「阿闍梨覚雅」などの語が見える。

島外第三者資料 清盛による後白河法皇幽閉後、治承四年(1180.3)、父の幽閉を解くためにもか高倉新院は厳島に御幸された。そのおり、神主景弘・安芸国司有経などに勸賞が与えられた。仏教関係者への勸賞として、この度の随行者の日記な⁶⁾

法げん一人なし給ふ、……、宮島の座主阿闍梨になしたぶ(土御門内大臣・源通親・高倉院厳島御幸日記)

当社座主尊叡勸賞を蒙る(源平盛衰記卷12末尾)

座主尊永、法印になさる(平家物語卷4 尊永・イ・尊栄)

とあり、高倉新院帰京の日、二品(清盛妻平時子・建春門院の姉)亭においても幹部などに勸賞が「神主景弘、祝師(はふり)友之、【已上二人為一階】御導師前権僧正公頭(御白河院お氣入の三井寺の僧、後に第六十代天台座主、叡山の大家騒動して短期辞任)追可請」(山槐記180.4.9)と与えられている。

安元二年の千僧供養のあり、回廊は仁安よりやや増加して百二十五間、一間毎に僧六口が着座して法花経読誦、収容不足分は、南廊に新作仮廊廿間を増設、なお不足で「院御所之殿上廊」ほかに着座。夜に入り、これら着座の千僧の後に間毎に、海浜にも燈火がともされて「海底偏如敷火」き、聴聞衆・千僧之所従・結縁衆は板敷や浜に所なき有様であったという(供養日記61.3)。仁安の解状に「六間二面参詣宿屋一宇」(本宮分18項省略のうち)、供養日記(10.3)に「松木御所」あり、このころ島内に貴紳僧俗の居住宿泊施設が存在したとみて大過ないと思われる。

古く十二世紀前半の今昔物語集(巻17の20)に「安芸ノ国ノ伊調(イツキ)ノ嶋ノ祝師重正」の地藏信仰利生譚を載せている。承安(1172.3.18)の頃、神主景弘自身の沙汰として「安芸国一宮(=厳島)住僧」3口ほか河内国の七つの寺に「持経者」7口、都合10口をかかえており(平安遺文 5055号 P3899-3900)、幹部神官が仏教になじむ神仏習合の風が厳島に窺える。島は神聖にして遅くまで仏徒を寄せずとの論もあるかとも思うが、清盛全盛の十二世紀後半、厳島はこつして天台寺院との習合をみたものと思われる。

敵島明神の正体、本地説として観音説と大日説ほかがある。

1 相伝云、当社は観音菩薩之化現也

(平家納経・平清盛願文⁶⁾ 110a)

2 等身十一面、【号伊都岐島御正体、…】(山槐記¹⁷⁸⁾ 1112)

(山槐記は清盛女徳子の懐妊出産の諸記事・諸仏中、十一面観音を敵島の正体即ち本地仏として載せている。)

大日説は建春門院(平滋子)の神宝奉納関係文書⁴⁾に現れる。

3 御正体鏡参面 大日 十一面 毘沙門 (1171.6.22)

さて鹿ヶ谷事件など後白河院と清盛は元来不仲であった。承安四年(1173)、後白河院・建春門院夫妻の敵島御幸のおり、渋々の

御参詣にか院は願文をお忘れの由(源平盛衰記卷3・新出敵島文書58号⁵⁾ p.272)であり、女院の願文を引くが、願文中の女人・国母は建春門院⁶⁾高倉天皇母である。

4 大明神本地正体御鏡三面、……妙法蓮華経…大日経…大日

真言百遍、十一面真言百遍、毘沙門真言百遍、……此中大

日経者、所奉納銀篋、(ほかに馬剣弓を奉納)……復有八女、

共施丹青、限以三十三、… 夫当社者、尋内証者、則大日也

有便于祈日域之皇胤、思外現者亦貴女也、無疑于答女人之丹

心、我既為本朝之国母、旁足蒙当社之神恩、…

眼目はジチイキノ・コウインヲ・イノルニ・タヨリアリと判断され、高倉帝元服の年(1172)、清盛女徳子は入内(高倉女御 中宮)ゆえ高倉・徳子間に皇孫男子(具体的に安徳天皇 1178)誕生をお祈りのことと察せられる。

修辞上、内証と外現、大日と貴女がそれぞれ対句をなして内証を純然たる女性とみるにはやや無理があり、祈願の主対象大日如来は男性と見なされる模様である。しかし、観音と思われる三十三の化身の数、「十一面・毘沙門」の語から敵島社既存の女性・男性の神

仏を前提として更に大日を加えた願文と思われる。

承安の御幸の三年後(安元二年 1177.8.3 野坂文書^{320号)}、高倉天皇は敵島の正体供養に「当今御自手摺書御正躰」の大日如来像と十一面観音像をものされている。

結局、女院などによる鏡の奉納や願文は敵島における既存の十一面観音(明神)と毘沙門(客人社)の存在を認めつつ皇室側より大日を新規追加したあり方と思われる、神社側の伝承的祭祀とは別の本地説と判断される。(大日後述第五節・第七節)

三

平家物語卷3大塔建立は真言宗高野山金剛峯寺の大塔の修造を了えた清盛が高野奥院にて弘法の霊と覚しき僧に「次は敵島の修造を」と勧められる霊夢譚である。その類話が「古事談卷5や 保暦間記にあり、三者の末尾、清盛敵島修造後参詣、託宣部分を以下比較する。三者中、は託宣に無知の筆であり、創作構想上、明神自ら託を下して拙い。

(敵島大明神託宣) … 悪行あらば、子孫までは叶ふまじきぞ

(巫女の託宣) 君八可至従一位太政大臣云云、能盛後藤太トテ

共ニアリケルヲ、同託宣ニ云、汝モ可為当国守(安芸国司)

云云。果不相違云云、

内侍(巫女に神託) 汝知ヤ否。弘法大師ノ云シハトテ。神上セ給リ。爾コソ太政大臣ニモ上リ。一門悉ク繁昌シケル。

敵島に対する清盛の信仰と功績が著名ゆえ はハッピーエンドに結びと思う。しかし、平家物語のみは真言側に大塔修造の利益あるも清盛に悪行あらば平家の栄華は一代限りの旨記して釘を刺す。この点残酷であり平家を見限った結果論となっている。弘法の霊側による清盛否定を清盛篤信の明神がなすが、一般に神の意志を人に伝える場合、例えば巫女(一次電力を二次伝送する場合の電源変圧

器トランス)の如き中間媒体を要する。(前に第一節勸賞の項に引いた)二条尼の曾祖父源通親の日記、日記所見の清盛に神意を伝えて氣を失った叡島の幼い七歳の幼い巫女内侍などこの例である。媒体ぬきに清盛と明神を相殺する。言わば恩をきせて釘刺し見限るにはそれなりの理由が存したか。

清盛が起こしたクーデター(1179.11.4-21)で清盛は後白河院の院政停止と幽閉(1120 宇の御所)、関白以下多数の官職を解き、この人事で清盛の異母弟頼盛も解官(兵範記 1179.11.17、解官に能盛の名もあり)、頼盛の所領は没収(玉葉 1179.11.22)、没収地のうちの一つ、安摩庄は叡島の東側・旧日本海軍の江田島を含む一帯であり、この庄を手放す頼盛の心境交りの文書が次の頼盛奉免状(芸藩通志巻18 1179.12.27)である。状に「奉免、安芸国安摩庄所当物」とあり、

1 老齡ゆえ先行き知り難く私領を叡島に寄付する。但し、
2 「故 鳥羽御願 高野御塔」例進の年貢と

3 「本家 八条院役」を怠りなく願う、外は叡島へ託す云々。
八条院は鳥羽院の皇女 本家とは土地所有権者、頼盛はその領家即ち土地管理支配権者である。

翌年(1180.4.15)、八条院庁は頼盛のこの申請に任じてこれを現地の在官に下命したが、清盛が異母弟の願いを容れたか、断乎没収したかは別問題である。前の釘刺しに関わるか。

平家滅亡後の安摩庄の経緯 頼朝の配慮で所領回復(吾妻鏡 1184.4.5-6)をみたというが、頼盛没後(1186.6.2・56歳)及び八条院没後(1211.6.26・76歳)の翌年(1212.7)、齋院庁は叡島社司へ下命、即ち安摩の得分を叡島本社より新社(外宮)へ半分移せと。文書中に「故入道大納言頼盛卿、以私得分、始奉免本社、後改移新宮、云彼云是共以彼卿所為也平、非可黙止、於自今以後者、(本社新社半分ずつ云々)」(芸藩通志巻18)と。八条院在世中、得分は叡島本社に

納められていたと思われ、遺領の新たな皇女礼子への継承を機に削ったと思われ、約三十年前に逝去した頼盛の所為云々は故八条院に遠慮した理由づけであろう。結局、領家的実権が平氏より源氏の幕府へ移行しただけである。(後年、高野山太田庄の押妨など鎌倉地頭輩による侵蝕は著しい。)

皇室・真言・本新両社などが微妙にからむが年貢未収は高野山に痛手と思われる。新社即ち外宮への移譲のこと・高野のメリットとは何か。ここで再び 平家物語 古事談 保曆間記を比較する。

安芸の国叡嶋、越前の氣比の宮は、両界の垂跡で候が、氣比の宮は宋へたれども、叡嶋はなきが如に荒はてて候。

日本国之大日如来八伊勢大神宮ト安芸之叡島也。大神宮ハアマリ幽玄也。汝適為国司、早可奉仕叡島云々。

越前氣居ノ社八金剛界。安芸叡嶋ハ胎藏界也。叡嶋ノ社破壊而無ガ如シ。院へ申サレ候テ。

伊勢大神宮と叡島を金剛界(男)・胎藏界(女)の金胎両界ペアとすれば、の氣比が排除、氣比と叡島をペアとすれば、伊勢が排除される。伊勢神宮の内外両宮構成は周知のことであり、伊勢内宮を胎藏界・外宮を金剛界とすれば排除の矛盾は解消して 三者を満足する。即ち伊勢・叡島・氣比はそれぞれ両宮構成の謂である。長門本平家物語巻9・巻5にそれぞれこう記す。

氣比の宮と申は、金剛界(男)のすゑ跡なり、叡島に客人の宮(男)と申は、けひの宮是也、けひの宮に沖の御前(女)と申は叡島是也、胎金兩部の垂跡顕れてましませば……(p.307)

越前国氣比の社は金剛界の神なり、……氣比大ばさつ是を憐み給ひて、……敦賀の津に跡をたれ給へり、されば氣比の社さかんなり、安芸国叡島の社は胎藏界の神なり、この二神は胎金兩部の垂跡なり、叡島の社破壊してなきがごとくなり、(p.184 叡島の金剛化・大菩薩化を勧誘か)

なお、右は胎金の順であり胎が先、これは台密即ち天台密教の立場である。だが種々の理由で長門本を単に天台と即断はできない。真言宗の東密は金胎と金剛界を先にする。

古事談の成立とほぼ同じ頃、建暦二年(1219)の敦賀郡古文書⁷⁾に「氣比太神宮政所」とあり、正安三年(1301)以前の土木工事が、時衆遊行二世(他阿弥・真教)上人による氣比修造の土木工事を遊行上人縁起⁸⁾に描く。絵の詞書に氣比を「太神宮」とする。(一般に大神宮とは伊勢のことである。)即ち

越前国角鹿笥飯【近來言敦賀氣比】太神宮は、大日如來の垂跡
仲哀天皇の宗廟也。(詞書卷8第4段 p.89 絵の説明「敦賀氣
比大神宮西門の参道を造る」p.63)

と。以上から古事談などは真言・大日・大神宮化が敵島の繁栄を招くと語る模様である。

かく見れば久保田論文における疑問点の糸口が見えてくる。清盛全盛期の天台宗は前に見た。真言が島内に大きくなる余地は少なく、天台真言を超えて島全体が一朝にして滅びたとも考え難い。真言僧の勧めは(天台に比べて敵島真言はあるか無きか)「荒れはてて無きも同然、(天台との相対上)真言寺院建造の比喩的勧誘にして時代の息吹を象徴する表現かと察せられる(以上、第一段階の解)。

四

敵島における神仏習合の在り方には二つが考えられる。一つは狭く島内のみに限定する在り方であり、具体的には本地胎蔵界十一面觀音の垂迹した神を敵島女神、金剛毘沙門のそれを客人宮とする在り方である。いま一つは島の内外にわたる在り方である。前者は島内のみで成立し得るが、後者は複雑であり、島内を一括り、島外を一括りとする両界構成であり、さらに島内に男女何れをメインとするか、その男はなどと覇権が問われはじめる在り方である。

敵島神社の特徴的景観とも言うべき朱の大鳥居は所謂「両部鳥居」であり、鳥居のあなたを甲界・こなたを乙界と見做し得るかと思う。仁安の解状に外宮分として本土側に殿舎の造築があることを思えば、清盛在朝の頃、両宮的機構整備が進んでいたものと察せられる。

平家物語に似た荒果状況 鎌倉前期、本宮は二度焼亡した。最初は建永二年(1207.7.3)の島内火災。その再建中、安摩庄得分の外宮への分割移譲令(1212.7)もあつたが、平家以来の佐伯神主家の経済力がなお強く、比較的短期間に再建・遷宮(1215.12.19)をみた。(この前後の経緯、新修広島市史に若干の論及がある。)

後鳥羽上皇と鎌倉が対立した承久三年(1221.5)の政変後、平家残党つぶしか佐伯の上皇方加担か、神主家は佐伯から外宮に拠る幕府御家人・齋院ゆかりの者に移って、佐伯は政所家に転落した。貞応二年(1224.12.2)再度の火災あり、十二年後(1235.12.9)に再建着手、仁治二年(1241.7.17)遷宮をとげた⁹⁾(新出敵島文書¹⁰⁾。火災被害のない外宮もほぼ同時に修造開始(1235.12.14)、翌年(1236.10.13)遷宮¹¹⁾。

多くの「未造殿舎等」(内宮分18〜19箇所、外宮分6箇所)が莚生(広島県史 敵島野坂文書 1862号)、神道関係では内宮分の客人御方の一つとしての位置づけのもとで山王社一宇は再建されたが「×山王拜殿一宇」は未造となった。この度の未造分より仏教施設を次に挙げる。

内宮分 夏堂(=本地堂)・×常行堂・×山臥床・鐘樓

外宮分 御読経所・×神宮寺

(「此外雖有可加修理舍屋等、不及注進之」とあり細部不明)なお後々の正安の文書末尾にも「貞応未作分」とするものには×印を付した。は正安の文書に「鐘樓一宇【造進畢、但焼失了】」¹²⁾(p.165)と割註による断りがある。

海を渡る渡り廊下、回廊は敵島の参詣に欠かせない。その間敷の

推移を次に示す。嘉禎の間数は再建途上の数値である。

1 1 3 (仁安)	1168.11
1 2 5 (安元)	1176.10
4 1 (嘉禎)	1238.4
1 1 6 (仁治)	1241.4
1 8 0 (寛元)	1243.11
1 8 0 (乾元頃)	1302.9

後述第五節参照、源平盛衰記卷13
同一説話中に120と180の二種あり、百八と記す詩文などは仏教の煩惱の数(回廊の燈籠数)であり、間数ではないと判断する。

回廊百八十間を未造とする正安二年(1304)の大願寺1号⁴文書の問題点を次に検討する。真言宗大願寺は厳島社造営修理専門の寺であり、他寺社修造のため九州方面にも赴いた。広島県史(5.7)の解説によれば1号文書「一通だけがとび抜けて古く、他は戦国時代の永正のころ以後のものばかり」で寺の創建は「遡つてもせいぜい戦国初期」であり、造営関係の文書ゆえ「移管されたものであろう」という。この文書は「未造殿舎造営料言上状案」とあつて造営料の案文である。「未造」とあるが前の遷宮時に完成済の大宮御方や客人御方がこの文書に再掲載され、正安より二・三年後に参詣した二条尼の筆から回廊百八十間も完成済と思われ、未造とするには不審である。

こうしたことから正安文書は新規建設もしくは現況に修造の手を加えれば費用石高(人件費 工分一人六升)しかじかと言わば企画・見積書のような性格を有する文書と思われる。合計百五十箇所を載せ、省略せよとの神主殿の仰せで政所分を省略したと文書末尾にあり、公的上奏分の計上である。以上考慮の上、仏教施設(含一部神道施設)を次に挙げる。7・10・14は初出である。

一内宮方

1 常行堂 一宇三間四面	三百五十七斗二升
2 山臥床 一宇七間一面	二百十二石(斗升以下切捨)
3 多宝塔一基	三百七十石
4 経蔵 一宇五間四面	百二十七石
5 鐘楼 一宇	百四十四石
6 夏堂 一宇	百八十四石
7 国方御読経所 一宇七間四面	四百十三石
8 御読経所 一宇三間一面	八十五石
9 御堂 一宇一間四面	百八十二石
10 座主坊 一宇五間四面	二百四十六石

一外宮方

11 神明寺御堂 三間四面	百九十七石
12 神宮寺御堂 五間三面	二百七十八石
13 水精寺御堂 二宇并坊舎四宇	
14 大日堂 一宇板瓦葺	百六十三石
15 毘沙門堂 一宇	百六十三石
16 小社 三宇	十二石
17 同拝殿 一宇三間	廿一石
18 同坊舎 四宇	二百五十石

1 常行堂以下全て石数表示があるが、一箇所、一見外宮方立地にみえる13水精寺のみ石数表示がない。14・15・18の宇数が水精寺に一致することから13は14以下の標目と思われる、神道の16・17は水精寺の管轄下と判断される。水精寺の右肩に区切り符号の合点あり(後筆か)、「一内宮方・一外宮方」の如き一ツ書き表記にて一水精寺方と記せば明快である。厳島図会巻4大日堂に「麓より十八丁、弥山の本堂にして所謂神護寺これなり。……」(p.333)とあり、「毘沙門堂」もまた弥山山中に立地する。一ツ書き無く、大日堂以下所管分のみ記して水精寺それ自体の記載がない点、注意を要する。

全て企画見積計上と思われ、建造の未既・取捨可否は経済の都合次第であり、別問題かと思つ。

正応二年(1289)の田所文書に「天台末五ヶ寺公文職得文事」とあり旧佐伯の分派か田所が総務文書権を握るが、安芸国内に未寺多数を有する天台が数あるとは考え難い。これが安芸一の宮敵島の天台寺院を指すとすれば弥山水精寺(平家時代、周防国に寺領あり、安芸未詳)であろう。心永の頃まで細々と存続したか。この寺と正文安書に企画される真言寺院(滝山?)水精寺との関係未詳。前者が大日を容れる(「真言化」)ならば存続が、新設か。

五

「本地弥陀」と二条尼は記し、源平盛衰記巻13に「つ記す。

御垂迹は天照皇太神の孫姿竭羅龍王の娘也、本地を申せば、大宮は是れ大日、弥陀、普賢、弥勒、中宮は十一面観音、客人の宮仏法護持多聞天、眷属神等、釈迦、薬師、不動、地藏也、総じて八幡別宮とぞ申しける。(八幡勧請、將軍賴経系?男山?)本地部分、大宮に大日・弥陀ほか見えて首座を占める。本地弥陀垂迹八幡であり、八幡の本地説は古く続本朝往生伝¹⁶⁾・曾我物語巻2等に見え、弥陀八幡が祀られて十一面や客人は第二位以下に転落か。多聞天は毘沙門天に同じい。

「八幡別宮」は八幡が他所より敵島に勧請されて当社が八幡化した現実の反映と思われる。八幡勧請の逆の例として平安末期に敵島より京都に勧請されたと思われる別宮の例を次に挙げる。

- 伊都岐島 【五条坊門富小路別宮……】(山槐記178.6.28)
- 伊都岐島別宮【六波羅御所巽角御坐也、】(同0.14)
- 伊都岐島別宮【坐八条亭云々、】(同10.17)
- 平家滅亡後直ちに清盛を怨む前斎院次官親能の検地をうけたか、平家没官領となつた京の 後はに亡父藤原親證より敵島御家人神

主親範への相続を幕府承認(1298.12.20・芸藩通志巻18)、外宮地御前や桜尾城に直接赴かず遙任か、敵島支配の京都拠点かと思つ。

敵島の女神が第二位以下に転落して武士の神たる男性神・八幡化を批判すると思われる資料を次に「つ示す。貞和2年(1156)の奥書を有する敵島縁起絵巻¹⁷⁾の末尾より次に引く。

又、殿庭に無沙汰、異姓他人、神主等して、本より神主、奉はしめ自國王、……御神の心、あくかれて、虚空に御座、仍て天下、をたやかならずして、破国と成、御神の心、あくかれて、をはするによつて、可成ものには子々孫々を主として、御社を造てん時には信心おつくして、……(p.383)

敵島縁起自体は峰相記や源平盛衰記巻13にも一部見えて室町時代に御伽草子の本地物として盛行したが、南北朝の戦乱を一部反映、かかる批判の表出は管見では貞和の絵巻のみ。神主家より政所家に転落した佐伯による批判の表出と思われ、あるいはまた女神死没の地たる地御前、管弦祭の由来を想うべきか。

文安四年(1447)の臥雲日件録に七年前に敵島に参詣した平曲の琵琶法師城呂座頭から聞いた敵島法会のにぎわいと俗伝が記され、俗伝中、敵島の八幡弥陀化に対する批判が窺える。女神に新夫・旧夫あり、旧夫はすなわち弥陀の垂迹、新夫は乃ち毘沙門の垂迹、女神は法会の騒動に紛れて新夫の廟に到ると云々。

敵島九月十三日有会、諸国年々来詣、其外或九万艘、或十万艘来集、故回廊之間、往来喧動、未有一人閑行、盖神好念闍也、俗伝、明神有新夫・旧夫々々乃弥陀垂迹、新夫乃毗沙門垂迹也、明神於念闍中、到新夫廟云々、(注 廟=广+苗)

本地は弥陀、弥陀の垂迹が旧夫(八幡)であり、参詣人は主神たる女神を拜せずとの皮肉を含むか。

正安(1300)の直後、乾元が嘉元(1302)の二条尼が「高倉の先帝も御幸し給ひけるあとのしらなみもゆかしくて」敵島に参

詣、問はず語り』巻5にこう記す。

かの島につきぬ。漫々たる波の上に、鳥居はるかにそばだち、百八十間の回廊、さながら浦の上にたちたれば、おびただしく船どもも、この廊につけたり、大法会あるべきとて、……(夜)

……本地弥陀如来と申せば、光明遍照、十方世界、念仏……

多数の参詣者ににぎわう九月十三日の大法会が鎌倉室町期における敵島の公的行事であり、メインは男であったと思われる。

一般に八幡神は武の神であり、幕府の八幡弥陀化推進の施策も理解されることと思う。承久の政変後、幕府御家人神主が推進したであろうこの施策は、山口の大内義隆の前に天文十年(1541)、第14代神主興藤敗死と子息第16代神主広就切腹(棚守房顕手記)に終焉。大内は大願寺・弁天好みかと思うが大内滅亡後、棚守の本地説教示か大江即ち毛利元就の敵島願書^⑤所見の本地観音説が現れる。

夫惟敵島大明神者本地大慈大悲之観世音菩薩也、……

弘治元年(1553)乙卯十月廿八日 大江元就 敬白

観音説は伏流水として連綿、換言すれば敵島本来の在り方は承久を契機にねじれ現象を呈して(幕府弥陀大日・佐伯観音毘沙門)二重構造^⑥となったが、毛利によって回復した。ただこの後、関ヶ原の敗戦後、毛利は領国(6防長2)を徳川に削られて安芸国より離れた。

清盛在朝期に栄えた天台は真言に押されて次第に退転、真言との交替現象が起こる模様であるが、僧侶ゆえ武力をもちいて勝負を決するわけではなく、むしろ寄進や寺領の押妨侵蝕、舎屋興廃等により漸次変化するかと思われ、短時日に白黒つけ難い面がある。前述のねじれ現象はこれを否定すべきではない。これがため旧佐伯系唱導者は権門寄進による経済的基盤を離れて熊野系唱導者に交流、批判するに文学史的には過去の栄光を夢みる逆コース・歴史の進行に逆立ちする一面はあるがその基盤を庶民に求めて民衆向け唱導文芸

(敵島本地)を普及させたものと思われる。熊野と敵島の硬貨の表裏の如き文芸的関係は夙に平家物語の卒塔婆流(この条、胎蔵界云々の本文、注釈を付けることすれば、観音とするべきであろう)にも現れている。

六

江戸中期(1702)の『敵島道芝記』^⑦に鎌倉室町の名残を求める。上卿屋敷は敵島の中に残るといふ。なお上卿には二種あるかとも思われ、関与のあり方に注意を要する。

滝小路にあり。国府の上卿同姓三宅氏にて、宮島常住の上卿代なり。鎌倉よりつけられし親実神主(斎院次官親能の次男、初代神主)是をまうけ置かれしよしつたへいへり。(巻5 p.152) 田所屋敷は島より退転した模様である。

安芸郡府中にあり。国府上卿三宅氏は也。毎年二月十一月両度の初申鎮座祭の時奉幣使代を勤む。……

一説に敵島四季の祭祀に奉幣を進めらる。…(巻5 p.154)

八幡別宮もまた島より府中に退転した。(宇佐?鎌倉・男山?)

御社 三座 社人 三宅中務 …… 安芸郡府中にあり。当国

三の宮多家の神社の境内にましますなり。抑八幡別宮と号し奉るは筑紫宇佐宮を移し、三女神をまつり奉るなり。(巻2 p.86)

鎌倉時代の田所文書(1289-123)によれば安芸国一宮即ち敵島二季二月十一月の祭と八幡宮二季四月九月の祭に田所が関与し、九月の祭は二条尼の記すように盛大であったがのち廃絶した。道芝記の頃、田所三宅氏は四月九月の関与を失って九月十三日の法会それぞれ、記載されていない。

江戸末期(1837)の敵島図会^⑧には上卿屋敷の記載はないが、府中上卿田所氏の項にやや詳しくこう記す。

大内義隆卿当國にうち入の時、五千石餘の采地を削られ。すで

に家も絶なんとせしを、毛利家より奉幣雑費料として五百石たまはりしに、また福島氏^⑤に削られ、……(巻4 p.381)

その昔の祭礼に都より発せられた奉幣勅使が安芸現地に定住、これが田所氏であるが、田所文書中に安芸各地における多数の田畑と奴婢所従を記載する。田所氏は本姓佐伯・源・藤原・三宅・石井など様々に称し(太田亮・姓氏家系大辞典 p.3536)、おそらく御家人神主藤原氏に結んだ旧佐伯氏の一部が安芸国内に存在したものとされる。田所は大内に領を削られて(図会)、九月十三日の大法会もまた道芝記や図会から消え去った。

七

室町末期の敵島天台の様相 その記録を殆ど見出し得ない。大内氏が衰微の寺院や儀式に経済援助をなした例が諸文書に見えるが焼石に水であったか。敵島図会巻2に天台の衰退を窺わせる条があるのでそれを次に引く。

道成山無量寿院神泉寺【浄土宗なり、昼夜の更漏とせを報ずるを以て、俗に時寺といふ。南町にあり。】(p.140)……

(絵 宝泉院・圓城院神泉寺・光明院・清盛の妻二位法尼の肖像あり)……その原は宗旨天台なりしを、天文(1532-1555)のころ堪かんあ上人中興して今の宗に改めたりといふ。(p.147)

調査するに天台宗より直ちに浄土へ移行したのではなく、その間、天台 時宗 浄土と時衆の関与が考えられる。堪阿は時宗僧と思われる、室町末の棚守房顕手記(房顕記)にこう記される。

当嶋へ道場神泉寺可為無祿処二、……山口ノ道場ノ為末寺
 田布施貳十石、在所アル由申候条、……貳十石ニ神泉寺寺領ニ
 申付ル所也、(続々群書類従4史伝部 p.172)

山口の道場は広島県史 所収の房顕覚書(第63項 p.1151)の道場の傍註に「善福寺」とあり、「時宗血脈相統之次第」^⑦所見の時

宗寺院山口善福寺と思われる。右覚書(第70項 p.1153)より次に引くが観音堂の再建は永らく放置された模様であり、

御本地観音堂之事、去天文十年(1541 水害により崩れて)……
 天正九年八月(1581 造営調つて)御本尊ヲ移シ奉ル、……夏
 中時、花香於大御前之經所執行、卯月八日管弦経同前也、
 と再建に四十年を要して熱意がない。その後も観音講天台大師講などが本地堂即ち夏堂にて執り行われている(敵島図会巻2)。

敵島の天台は、概ね16世紀半ば頃までに時宗に移行したと推測されるが、しかしその時衆も衰退した。これに前後する頃か、敵島に

「座主代」増弁あり、(1541.4.19 野坂文書 378号)、なお確かではないが新言僧の可能性が大きい。
 さて口語りとしての本地物は室町末期より江戸初期までに次第に古浄瑠璃などに押されて衰退、江戸時代にはほぼ活動を停止して知的文献整理の段階に至った模様である。当時における敵島の両界説に注目する。『敵島の本地』の二つ、元和八年(1622)写本^⑧の本地説を次に掲げる。

敵島明神の本地 胎藏界の十一面
 客人宮 の本地 金剛界の毘沙門

次に明暦二年版本^⑨(1656)には胎藏金剛の字句が無いが本地説は元和本に同じい。但し、明暦版本独自の注目すべき変化があり、右 の間に「中の御前と申は、娑かん羅國の三の宮、本地は大日如来にて」とヒロインの妹が突如現れて他に例をみない。

内容要約「海の国で女神と客人宮と王子と親子三人暮らしていたが男宮が女神の妹三宮に浮気、女神は海の国を去って敵島へ」云々、三宮の役割は海の国での夫の浮気相手、海の国より敵島へ場面を進める端役として通常は作品中ただ一度現れるのみである。

明暦版本 と並べ、と より金胎の語をカットして、胎蔵界の語は末部へ移動、弁財天に転用、即ち編集上は観音より語を抜き、思想上は大日の応化として弁天一つに集中利用、大日尊崇者の筆と思われる。明暦版本の作品最終部を引く。

生身の弁財天と現はれたまふ、胎蔵界の化身にて無縁の衆生を引導し給はんがために、今垂迹を現し給ふ、……こゝに蔽島大明神と現はれ給ふ也 (p.184 仮名を漢字に適宜改めた)

以上二作品の外、続群書類従本『蔽島御本地』は女神の本地を胎蔵界のズバリ大日とする。一般に大日は人氣がない¹⁶⁾という。観音詣でを道綱母・清少納言・式部ほか平安女流はこそぞって筆にした。知識追求の大日に比べて大慈大悲の救済面が魅力だったか。

こうして前代の文献『蔽島本地』の字句添削の時代となったが、添削改作は作品尾部の化粧直しの域に止まり、中央部の言わばエンジン取換(例えば法華経 大日経)に及ばなかった。伝本論上、筆記・書承の時代に旧来の作品を文化的遺産としてそのまま遺すか改めるか、得失あるところである。¹⁶⁾

以下第四の本地説とも言うべき弁財天にふれておきたい。
元和八年写本の末尾、仮名を漢字交りに書改めて引用する。

されば大明神と誓はせ給は、我を念せん衆生には、……、子孫繁昌、疑ひあるべからず、もし不信の衆生には、……誓わせおわします。生身の弁財天と現じ、一切の衆生を、何ぞ諸願満足せざらん哉、諸佛の慈悲の本地、区々なれども、観音の大慈大悲の御願なるほど、世にすぐれおわしませ、悪魔を払ひ佛法を守護し給ふこそ、……蔽島の大明神と現われ給ふなり

本迹理論上、文意やや辿り難いが、伝本本迹 伝本本迹または複数伝本本迹の意であろうか。即ち 本地観音の垂迹が弁財天、(旧き十一面を袖にして) 本地弁財天の垂迹が蔽島神、 本地観音が本地弁天に応化、この本地の垂迹が蔽島大明神である、と種々に

解釈されるが、南北朝の貞和絵巻を除いて諸本いずれも末尾に弁天が表に現れる。以下、その信仰の関連資料を次に挙げる。

蔽島弁才天 琵琶の銘器「玄上」を模して作った「谷川ノ琵琶」を蔽島宝物図会巻1 (p.75-89) に載せる。琵琶の腹に「弘長貳(1262)年【壬戌】十月十一日、以玄上引懸作之、唯念作(花押)」

と、その上、右左に「南無妙音菩薩、南無觀世音菩薩」とある。妙音天自体は法華経妙音菩薩品に見え、平家巻7竹生鳥詣に「妙音・弁才二天の名は、各別なりとは申せども、本地一体にして衆生を濟度し給へり。」とあり、音楽琵琶守護の唯念個人の信仰かと思ふ。

臥雲日伴録(1474年)を次に引く。文中「伊豆江島」未詳、相模の誤りか。姉以下四者を説くが背後に真言・弁天あるか。

明神託宣曰、吾姉昔依文殊教化詣閑所、遂往南方无垢世界、然后不知所在、吾則垂跡此島、吾妹於山城国笠執山垂跡、又次妹於伊豆江島垂跡云々、蔽島九月十三日有会……

次に祭祀の三例を挙げる。伝宗祇(1471-1502)作、名所方角鈔に「蔽島 弁才天の社壇有、……百八十間……」とある。

天文五年(1562)、大内義隆は蔽島大蔵経の朽損を歎き、朝鮮板を求めんとて朝鮮への使者大願寺尊海上人に書翰を託した。その朝鮮国礼曹参判宛書翰に「安辨才多聞両天、為社主而年代深遠也、」(大願寺文書33号)とある。義隆は蔽島を厚く遇したが、その由来を尊海に尋ねて筆したか。多聞天即ち毘沙門が昔より蔽島の(男性)社主であること史実ながら弁天の(女性)社主として年代深遠なること、観音を袖にして賛同し難い。後発参入組の(第二真言)観音(天台)・高野大日(第一真言)・弥陀(八幡)に代わる新規商品開発、歴史ならぬ仏教的思考即ち一般論ながら後代の寺創建を弘法大師の開創、あれも弘法これもと開祖に帰して己を空しくする思考方法、対外交渉上の儀礼表現など種々の事情が考えられる。さらに永祿年間(1558-70)、僧萬念の詩文に「弁財天女之靈廟」、「此地築宮

安弁財、長廊一百八間廻」（芸藩通志巻30）とあり、それなりの廟と思うが江戸文献道芝記などはわびしい。

現代の弁天関係の資料、川勝政太郎著『梵字講話』に「辯才天」この字は「ス」であるが「ソ」とよみ慣はしてある。第三十二回は敵島の辯才天として信仰される大願寺（広島県佐伯郡敵島町）の印である。²⁰（第32回大願寺印 論者省略）という。

敵島弁天の勧請例、童謡詩人金子みすゞに詩作品「弁天島」がある。山口県仙崎漁港前の言わば豊二十枚程度？の小さい島を素材とする詩であるが、現地調査するに江戸時代、安芸の敵島をこの島に勧請している。航海安全・豊漁か。しかし、後述道芝記などには弁天軽視の趣きがある。

織豊時代の敵島三役は 柵守 座主 大願寺であった。柵守房顕記を読むに 安芸吉田出身の毛利氏の召に心じるなど心安かったが、当初、山口の大内・陶を警戒の気配があった模様である。さては専ら高野山に心を寄せ、は大内氏に近く、大内が倒れてその庇護を失うと持前の建築技術で各地の弁天造営のケースもあつたか。義隆の長州大寧寺（発音 対念寺 柵守房顕記）自刃の後、前述の敵島観音に対する元就の願書が現れる。元就が願書の年の毛利陶敵島合戦に社頭が血で穢れ、ために関係廟を島外移管か、道芝記巻2弁財天宮の項に沼田群の洞春寺村所在と八幡別宮なみに扱い、図会に項目なく、弥山登り口の上手に弁才天の小祠を描き（巻4 P.326）、大願寺什宝として「辯財天拾六神像」（巻3 P.240）と記すのみ。以上、弁天の取扱いと宗教者と権力の接近の一端を見た。

八

古事談や平家物語などに拠れば高野の真言関係者は皇室と結んで敵島を大神宮化する施策を進めたものと思われる。越前氣比の古祭神はなお理解し難いが、比較的早期に仲哀・心神・神功を祀り、神

社の性格変化を促した。何々大神宮・何々大菩薩また同じであり、（鎌倉時代の旧延慶本を母胎に延慶・長門両本が派生）延慶二〜三年（1309-10）に書写成立した延慶本平家物語（第二中の五 p.273）に「氣比大菩薩」（長門本巻五 p.284）も同 菩薩は仏よりも一格低い段階であり、神仏習合上、僧侶側が氣比に対して与えた呼称かと記される。

敵島に八幡を祀る鎌倉室町の一時代が存在したが、公的に何々大菩薩の称が無いのは、主祭神が古くより男性神たる氣比に異なつて男女変更の困難性が原因したと思う。やむなく外部からの男性神導入（別宮呼称）の結果を生み二重路線の方向に進んだのであろう。

さて清盛の敵島信仰の由来を語る「大塔建立」は傍流譚であり、抜差し可能な後補的性格の強い説話である。したがって平家物語それ自体の増補添削作業に関わる後々の編纂者の立場に立てば立つほど源平合戦現在時点よりも新しい後々の鎌倉時代の風潮が身に染み込む。

（敵島の天台施設に比べて）真言施設は無きも同然との嘆きとも、反面進出を窺う真言の時代の息吹とも解釈される真言僧の言葉が「大塔建立」に見えるが、源平の後々まで時間の幅を拡げれば別の「大塔建立」が現れる。

為先洞御願、為被宥平家怨霊、於高野山、被建立大塔、自去五月一日、被行敵密御仏事、而供料所、以備後國太田庄、……

（吾妻鏡・文治二年（1067-24）

後白河院は高野山に平家供養の大塔を建立する料所として太田庄を寄進の模様であり、平家滅亡の余燼さめやらぬ文治もしくはそれ以降、「真言僧」の意識に清盛時代の大塔を題材とする創作案が重畳したとしても不思議ではない。太田庄は平家後白河院・領家平重衡、文治二年（1086）、院は高野山に本家職を寄進されたが、後々、武士の押妨のため高野の現地支配力は衰退したという。²¹

武力による高野山領の土地押妨の実害がなければ、清盛以降、後々の武士のために、釘刺の必要はなく、一連の高野山文書を通覧するに頼朝の設置した地頭の類が（昔の平家による各地の侵蝕同様）高野山領太田庄を侵蝕して永らく問題となっている。時間の幅の拡げ方次第で説話編纂の重畳意識は「無きが如」き建永・貞応の火災に及ぶ（本稿第4節）。

仁安の解状に「私力」と言い、寿永三年（1184）の景弘嫡男景信への譲状案に「右、件七箇郷者、景弘之相伝私領也」⁴（新出敵島文書48号）と言つ。これら「私力・私領」の背後に清盛が存在し、表の私力私領は裏の安芸在地勢力の自己保全ゆえの清盛への協力、それが実態と思われ、些事に清盛が現れる必要はない。

太政大臣清盛は武門政治家であり、太政官制度下に施策すれば旧平安貴族勢力・中央の南北寺社勢力との衝突を予測したかと思う。（平家物語に衝突の種々相を描き、清盛を悪しざまに歪曲して描く。）失敗例（宇佐・頼盛太宰府）もあるが、清盛は複雑なる命令系統を有する中央の太政官を可及的に避けて特段の命令系統の少ない神祇官あるいは中央に対する地方を重用したか、例えば安芸景弘・大隅正宮清道など特に地方神祇層に力を及ぼしたか、その意味で清盛は中央の及ばない在地有力層との連繫強化を図つて平安旧勢力に対抗し、特に内海航路や港湾整備などに政治家としての業績を残したものと思われる（商業活動・外国船舶他）。

やや疑問の残る仁安の解状であるが、源平争乱も末期状況となれば旧文書焼却の懸念もある。解状に記される殿舎の数々は清盛最盛期、乃至前記時間幅の拡がりまで考慮に入れば、景弘在朝・平安朝末期の修造として考えておきたい。

結

平安以降室町江戸に至る神仏習合・本地垂迹説の流れを敵島に垣

間見た。平安末期、当社伝承の本地観音説に続いて皇室側の贈与も覚しき大日説の流入、気比に比べて敵島は大日の動的流入が遅く、後にも当社清盛全盛時代への懐古いわば平家残照が強くて大神宮等の呼称はみなかったものと思つが、鎌倉時代、承久以降には気比に近く八幡化する面をみせた。即ち八幡信仰の本地弥陀説の登場によって表裏強弱の差こそあれ武家時代には二重複線化する方向に進んで室町末期に至つた模様である。二重の片方は武断に断たれて復古したと思われるが、これに前後して第四の本地説、なお調査検討を要するが、本迹説の複合的展開とも言つべき現世利益面の強い弁財天信仰が現われて、表裏強弱もさることながら伝統的観音説との調和がはかられたものと思われる。

平家全盛時代への思い入れが強くて平成現代においても敵島・平家・清盛との連想的伝承が一般に残る。平家残照の意味では高野山の企ては失敗であつたかに見えるが、第一真言、第二真言と真言の敵島への滲透は根強く、天台の衰えと入替る如くに盛んとなって明治維新に及んだ、とみてよいかと思つ。

註

- (1) 久保田 収 『神道史の研究』・19737・神宮皇学館大学出版部
初出「神道史研究」第11巻9号・1963
- (2) 文化庁監修『国宝』15 建造物 ・1984(1994)・毎日新聞社・p.175
- (3) 大日本地名辞書・安芸佐伯郡敵島・1907第2版・富山房・p.1146
- (4) 広島県史 所収・1988・広島県
- (5) 名著出版復刻版・1970(旧版1927)・江木兼蔵・p.1154
- (6) 敵島宝物園会巻2所収・pp.175-196・1975復刻版・名著普及会
- (7) 富山県史・史料編 中世 33号文書p.33・1975.12・富山県
- (8) 新修日本絵巻物全集23・1969・角川書店
- (9) 註(4)書・新出敵島文書 97号

- (10) 日本思想大系所収・1974・岩波書店・p.240
- (11) 『室町時代物語集 第一』1962.5・井上書房
- (12) 国重政恒編・温故私記巻6・明治31年長周叢書・1996復刻版・p.95
- (13) 諏訪本地(兼家系)末尾「父のゆるされなければ」云々がその在り方は異なるが他社の例として参考になる。
- (14) 『敵島道芝記 全』1971・(広島県)宮島町発行
- (15) 敵島図会・1928・名著普及会1975復刻版
- (16) 福島正則 平家納経の保存に尽力。註(6)書・p.102・p.201等参照
- (17) 大橋俊雄『時宗の成立と展開』・p.310・1973・吉川弘文館
- (18) 『仏像 心とかたち』・p.136-138・NHKブックス20・1985
- (19) 昭和50年度広島大学国語国文学会秋期研究集会において
(1975.11.23 於広島大学文学部大講義室)
『敵島の本地』諸本の通時的分類——天台唱導・真言改作・雜纂——
と題してこの問題に若干ふれたことがある。
- (20) 一 條書房・1944・p.76
- (21) 日本史広辞典・太田庄(p.314)参照・1997・山川出版社